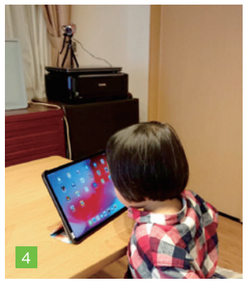
島根大学の
研究・地域貢献
事業紹介 1

人間科学部

読み手の成長も促す 乳幼児期の読み聞かせ メカニズムの解明を



1・3.学内にある赤ちゃん実験室には国内外の様々な絵本が用意されている。プレイルームの隣にはPC機器があり、プレイルームで遊ぶ親子の様子を観察できる。2. 佐藤講師が研究で注目している共同注意。指さしで相手に注意や関心を伝えるのも共同注意のひとつ。4. 子ども向けアプリ会社の協力のもと、子どもたちがデジタルデバイスをやめるお手伝いをするアプリを開発。実際に一般家庭に協力を募り、子どもがアプリを使用する様子をZoomとカメラで観察。

親子の視線の動きをミリ秒単位でAI解析

絵本を読み聞かせる効果として、「親子がコミュニケーションを取れる」「感性を豊かにする」「語彙力が育つ」などが一般的に知られており、今年2月末現在、全国の6割を超える1091自治体がブックスタート事業を実施しています。保育士の母を持ち、自らも幼い頃から多くの絵本に親しんできた佐藤講師。しかし大学進学後、その効果を示した論文がほとんどないことを知り、研究をスタートしました。「言語発達に関する論文は数多くあるのですが、子どもの情操教育や親子関係への影響を示した研究は想像以上に少なかったのです」。

生後9カ月～1歳半の赤ちゃんと親に協力を求め、実際に読み聞かせている様子を観察。視覚が未発達な月齢なので、絵がシンプルで、擬音語や擬態語などで構成されているオノマトペ絵本を親子に渡し、コミュニケーションの様子を見ていきました。佐藤講師が最も重視しているのが、相手と同じ対象に注意を向ける「共同注意」です。「たとえば親が犬を見ていることを理解した上で『ワンワン』という言葉を聞くと、犬と『ワンワン』が結びつきます。他者が注意を向けているものを理解できないと言葉を覚えられないので、共同注意は言語発達や他者の心の理解のベースになっています。この共同注意が絵本を通して行われているかを観察しています」。総合理工学部の縄手雅彦教授との共同研究では、AIによる解析を取り入れて親子の共同注意を映像から自動抽出し、研究の効率化・正確性向上にも取り組んでいます。

絵本の読み聞かせには大人の存在が重要

10年以上に及ぶ研究の中で見えてきたことの一つが、読み聞かせは共同注意が起こりやすく、親の成長も促すということでした。「乳幼児への読み聞かせは、子どもの集中力が続かなかったり、先のページをめくろうとしたりすることも多く、意外と難しいものです。読み手は、子どもの思いに沿って手助けをする必要があります。おもちゃと違って1人で読めない絵本の場合、大人の存在が重要なのです」。読み聞かせを多くしている親は、子どもを褒めることも上手なことが分かりました。「依然読み聞かせのメカニズムは解明できていません。さらに研究を深めたいです」。

佐藤講師は、デジタルと紙媒体での読み聞かせ効果の違いや、文化の異なる外国との差異なども研究。民間企業と共同で、乳幼児のICT(※)デバイス依存を防ぐアプリの開発も行っています。「日本の子どもたちは、OECD加盟国の中で最も多くゲームやチャットでICTを使っているにもかかわらず、教育での利用率は最下位。ICTの有効活用が不可欠とされる中、デジタル機器をうまく活用する方法をもっと教育に取り込んでいく必要があります」。

子どもに絵本を読み聞かせる効果は広く知られており、0歳児の赤ちゃんと親に本を贈る「ブックスタート」事業は全国の自治体で実施されています。人間科学部の佐藤鮎美講師は、親子のやりとりの観察を通して、乳幼児期に絵本を読むことが子どもの発達にもたらす影響について研究しています。

PROFILE

人間科学部 人間科学科
佐藤（さとう） 鮎美（あゆみ） 講師

小さい時に親に読んでもらった絵本は、今も好きなものがたくさんあります。思い出がたくさんあるのは、保育園の押し入れを舞台にした「おしいれのぼうけん」。絵が美しい海外の絵本も好きでした。お腹の中にいる第一子が生まれたら、たくさん読んであげたいですね。

※ICT…Information and Communication Technology（情報通信技術）